

芥川だより

発行日***2019年9月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http:// akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集・発行人

下村嘉明

〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624



***** 一部200円です *****



朝鮮の歴史認識が足りない

日韓関係が悪化し続けてる今、私たちに求められているのは冷静な態度である。夫婦でも破局的な状況に追い込まれた時には、二人が出会った時の事を思い出し、どうして二人は魅かれあったのか冷静に言葉に出せば二人の見方も変わると聞いた。それで冷え切った夫婦関係も改善するのだと。

国と国の関係も長い歴史があり良い時も悪い時もある。しかし、韓国と日本の歴史をたどれば、ずいぶん韓国に迷惑をかけてきた事が分かる。6月8日に朝鮮問題研究者である康宗憲（カン・ジョホン）さんの講演を聞いてビックリした。一部を紹介する。「日清戦争の時、清国の野望から朝鮮の独立を守るという出兵であったが、皮肉にも最初にした武力行使は朝鮮王宮への攻撃であり、国王幽閉、日本軍に抵抗する民衆の弾圧、さらに皇后虐殺まで行った。また、次の日露戦争では、またも韓国の安全と東洋永遠の平和のためと称して朝鮮の植民地化を進める。山県有朋は戦略論の中で「我邦利益線の焦点は朝鮮に在り」と書いている。このように、朝鮮の植民地化が日本の未来を決めるという身勝手な考えで大日本帝国は朝鮮を攻撃し、抵抗する朝鮮の人たちを陸海軍と憲兵、巡查でもって徹底的に弾圧と虐殺を繰り返してきた。

今、問題になった強制動員は、日韓条約で解決済みと言い張る日本政府と個人の賠償請求権はあるという韓国側の対立なのだが、日韓条約の請求権協定第2条では「両国間の請求権は最終かつ完全に解決された」とあるが、個人の請求権を国内法的に消滅させたものではない、と柳井俊二条約局長は国会で答弁している。」

このように個人の請求権は残っているのだから、私は強制労働を主導した日本政府と便乗した戦犯企業が担うのが当然だと思う。日本人としては過去の誤った歴史を直視することは辛い事だが、今こそ日本の未解決な戦後処理の問題に向き合い歴史認識を深めて議論すべきである。

死をめぐるあれやこれ (59)

消費税は、消費に対する懲罰である

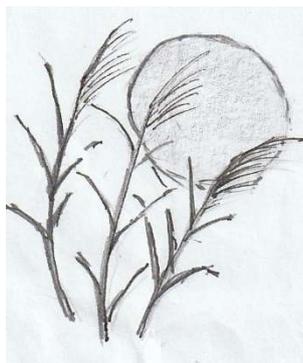
石川 吾郎

十月から消費税が10%に増税される。これほどの悪税も類をみない。庶民から奪い富裕層をさらに富ませる税。2%の増税に過ぎないとの論があるがそれは違う。税率で言えば二／八、二五%の増税なのだ。しかも食料など生活のための必需品にも、この懲罰は科される。消費税増税は人を殺す政策だ。サラリーマンの生活を殺し、年金生活者の生活を殺し、中小の事業者の商売を殺す。

訳のわからない軽減措置を実施する政府と、それを宣伝して増税自体は批判しない新聞・TVなどメディアは、我々の目をあざむくものだ。新聞メディアが消費税増税を批判しないのは、自分の新聞に8%の軽減税率を適用してもらいたいからだし、TVはスポンサーの大企業のものだからだ(NHKニュースもすでに安倍政権の宣伝機関になっている)。経団連などの大企業は、日本社会をデフレ不況に陥れる消費税増税を、なぜ求めるか？ 一つは消費税増税と同時に、同規模の法人税減税が必ず行われるから(前回の増税分が福祉に使われたのは16%に過ぎない) また一つには、輸出をする大企業には「輸出もどし税」という大企業優遇の制度がある。これは一般国民には隠されているが、製品を輸出すると消費税分の金額が国から輸出企業に支払われるもの。(裏に続く)

輸出企業にとつては消費税が高くなれば、このキックバックが高くなる、何もせずとも大企業は濡れ手に粟でカネが転がり込む（この制度によつて、トヨタ本社のある豊田市の税務署は常に莫大な赤字だ）。税金はカネのある所から取り、一般国民の生活を守るために使うのがあるべき姿だ。自民アベ政権はこの真逆を行っている。

先頃の参院選挙で、消費税減税を唱えたのは山本太郎の「れいわ」だけだった。「れいわ」は躍進をした。野党共闘は消費税には反対をしたが、減税までは踏み込まなかった。安倍政権がこれほど全面的に日本を破壊しているにもかかわらず、期待したほど野党共闘が伸びなかったのはこのせいが大きいだろう。野党共闘は次の国政選挙までに学んでほしい。庶民が消費税に反対しなければ誰も反対しない、というのが厳しい現実なのだ。今度こそ庶民の力を結集することが必要だ。



巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 66	坂本一光	2
哲学翁いの時事放談 16	祖蔵哲	4
大峰奥駈道 27	下村嘉明	7
大人の今昔物語 60	石川吾郎	8
B級サラリーマン渡世譚 74	明石幸次郎	8
オクラの山たより 36	因了生	10
隠された歴史 11	満田正賢	13
道を行く(5) 山辺の道(五)	成瀬和之	15
我がおくのほそ道の旅	成瀬和之	16
補足一 山刀峠	嘉	17
編集後記	嘉	17
ふみの道草 2	山椒魚	18
俳句	土田裕 影山武司	18

素老人☆よもだ帳(66)

坂本一光

◆九月の夜の不平

石川啄木は、若山牧水が主宰する明治

末期の詩歌総合雑誌『創作』(東雲堂書

店発行)の明治四十三年(一九一〇年)十月短歌号に短歌三十四首を寄せている。題して「九月の夜の不平」と言う。背景に、同年五月の幸徳秋水らが企てたとされる大逆事件や、同年八月の「韓国併合に関する日韓条約」調印などがある。鶴見俊輔が、

石狩の都の外の君が家
りんごの花の
散りてやあらむ

これも淡い感傷の歌だが、その底に、やがて日本の社会の病根、自分の生活の病根へとおりてゆくこととするもうひとつのモチーフをききわけることができるように思う(石川啄木全集第一巻「月報2」、一九七八年、筑摩書房)と評したように、社会の現実を直視し批判しながら、同時に内なる己を見つめた歌の数々が展開されている。それにしても百年を超えて今に共通する時代の匂いは何を意味するか、それをききわけてみたい。以下に三十四首を上げる。とりあえず解釈はなし。

秋の風今日よりは彼のふやけたる男
に口を利かじと思ふ

大海のその片隅につらなれる

島の上を秋の風吹く

くだらない小説を書きてよるこべる
男隣れなり初秋の風

男と生れ男とまじり負けて居り
かるが故にや秋が身に染む

燐寸擦れば二尺ばかりの明るさの
中を過ぎれる白き蛾のあり

その昔秀才の名の高かりし
友牢にあり秋の風吹く

いつも来るこの酒舗のかなしさよ
夕日赤々と酒に射し入る

わが友は今日も母なき児を負ひて
かの城跡をさまよへるかな

この日頃ひそかに胸にやどりたる悔
いあり我を笑はしめざり

公園のとある木蔭の捨椅子に思ひあ
まりて身を寄せしかな

公園のかなしみよ君の嫁ぎてより

すでに七月来しこともなし

やとばかり桂首相に手とられし

夢みてさめぬ秋の夜の二時

実務には役に立たざるうた人と
我を見る人に金借りにけり

女あり我がいひつけに背かじと

心をくたく見ればかなしも

ふがひなき我が日の本の女等を

秋雨の夜に罵りしかな

時ありて猫のまねなどして笑ふ

三十路の友が酒のめば泣く

ダイナモの重き唸りの心地よさよ

あはれこの如く物を言はまし

新しき背広など着て旅をせむ
しかく今年も思ひ過ぎたる

売ることを差止められし本の著者

に途にて会へる秋の朝かな

何となく顔がさもしき邦人の

首府の大空を秋の風吹く

つね日頃好みて言ひし革命の
語をつゝしみて秋に入れりけり

今思へばげに彼もまた秋水の

一味なりしと知るふしもあり

この世よりのがれむと思ふ企てに

遊蕩の名を与へられしかな

わが抱く思想はすべて金なきに

因する如し秋の風吹く

秋の風我等明治の青年の

危機をかなしむ顔撫でゝ吹く

時代閉塞の現状を奈何にせむ

秋に入りてことに斯く思ふかな

忘れぬ顔なりしかな今日街に

捕吏にひかれて笑める男は

人ありて電車の中に唾を吐く

それにも心傷まむとする

朝まだきやつと間に合ひし初秋の

旅出の汽車の堅き麵麩かな

地図の上朝鮮国にくろぐろと

墨を塗りつつ秋風を聴く

誰そ我にピストルにても撃てよか

し伊藤の如く死にてみせなむ

いらだてる心よ汝は悲しかり

いざいざ少し欠伸などせむ

何事も金、金といひて笑ひけり

不平のかぎりぶちまけし後

明治四十三年の秋わが心
ことに真面目になりて悲しも

三首目の『かるが故に』は、「斯く有るが故に」の略。『新しき背広など着て…』の歌中『しかく』は、「そのように」の意。なお、啄木の歌が掲載された二月前の『創作』八月号には、北原白秋の歌がある。

新らしき紺の背広を着しひとのあゆみをおもふ水仙の花

またその後、萩原朔太郎は『旅上』という詩を詠む。

旅上

ふらんすへ行きたしと思へども
ふらんすはあまりに遠し
せめては新しき背広をきて
きままる旅にいでてみん。
汽車が山道をゆくとき
みづいろの窓によりかかりて
われひとりうれしきことをおもはむ
五月の朝のしののめ
うら若草のもえいづる心まかせに。

こうして百年前の同時代、ほぼ同年齢の若き詩人たちの心に響き合った『新しき背広』は百年後の我々にどう響くだろうか。新しき背広を着て旅に出る―働き方（つまりは、働かせ方）改革が声高に

言われる時代であればなおさらに、それは誰にとつても叶わぬ夢なのであろうか。もう一つ触れておきたいことがある。

御一新以降、この国の政府と云うか支配者は、なぜ隣の国々を必要と思えばいつでも貶めるのであろうか。そしてなぜ、この国の人びとは、かくも容易に煽られ乗せられるのだろうか。半島をめぐる百年前の啄木の歌に、敗戦を挟みながら今日まで続くこの国の嘆きを見る思いがする。我々が宰相のおかげで秘密保護・安保法制・共謀罪などをめぐる法制も内には張り巡らされている。知らねばならぬ、『すべての政府はウソをつく』と。『ききわけ』には程遠いだろうが、啄木への素老人の返歌。

わたしの中の私はあなたの中の私かと明治の青年啄木に聞く

啄木の歌は百年超えてなお我は私と私に届く

友好と信義の歴史二千年憎悪百年遠ざかる国

百年の憎悪が一衣帯水の友好二千年を根こそぎにする

半島のことは半島の、沖縄のことは沖縄の、主権者が決める

人のものに手を出さない。手を出す権利はない。それは誤りであると知るのは、アベやトランプなどの政治家にも求められる最低のマナーであらう。

■大分の素老人
(かたちは心であり、心はかたちになる)

哲学爺いの時事放談(16)

祖蔵 哲

「表現の不自由」再び自由を哲学する

先月号「自由の概念からみた保守と革新の哲学」というテーマにおいて、「自由」という概念が「感覚的」ではなく、人間理性を通してのみ理解できうる「歴史的哲学概念」であるということ話した。政治において、その自由概念から生まれた双子「リベラルとリバタリアン」の対立は「保守と革新」の立場を逆転させた結果、今日のような「忘れられた階層が強い政権を支える」といった「ねじれ現象」を起こしていると分析した。その矢先、この現象を再現するかのような「事件」が再び起こった。

(1)「表現の不自由事件」

8月1日から愛知県内で開かれていた国際芸術祭「あいちトリエンナーレ2019」は3日、企画展「表現の不自由展・その後」の中止を決めた。慰安婦を表現した少女像など、過去に各地の美術館から撤去されるなどした二十数点を展示していたが、丁度その前に起こった「京アニ放火事件」をまねたガソリンをまくなどの抗議の電話が殺到するなどしていたからだ。事件の表面だけしか報道されないうが、そもそもこの「表現の不自由展・その後」とは一体何なのか。

「表現の不自由展」は、日本における「言論と表現の自由」が脅かされているのではないかと強い危機意識から、組織的検閲や忖度によって表現の機会を奪われてしまった作品を集めた展覧会である。「慰安婦」問題、天皇と戦争、植民地支配、憲法9条、政権批判など、近年公共の文化施設で「タブー」とされがちなテーマの作品が、当時いかにして「排除」されたのか、実際に展示不許可になった理由とともに展示したのである。ではなぜこれが3日間だけで主催者が中止の判断をしたのか。記事のように匿名一般者からの抗議の電話やFAXがそうであるが、一番の要因は名古屋市長の発言である。しかし、その前にわずか三日間の開催でどれだけの方が展示内容を見たのか、抗議の電話をかけた人や脅迫をした人々、市長も含めて、が実際に会場に足を運んで見たのかどうかはわからない。

報道ではネット上で抗議の議論がなされていたとある。そのような状態で市長の発言は、展示内容を「日本国民の心を踏みにじるもの」とし、そして行政執行者として『政府に批判的な芸術に公的資金に入れるのはどうか』と決めつけた。この発言が「心情的抗議」を煽動し大きく膨れ上がったと考えられる。しかも政府の見解はこれを追認した。

さて、この事件の事実と問題点を整理しよう。まず、企画展は「不自由の具体例を表現」したことあること。そしてそれが、「公共空間」でなされたこと、さらにその「表現されたもの」に対して「一部の人が「不快」を感じたこと。そして「その排除の要請」をしたことである。「形式的」には以上の記述で間違いはないはずであり、考えてみればこのようなことはよくあることである。しかし、「不快」とは個人の気持ちや趣味の問題で絶対的な基準ではないはずである。お天気用語の「不快指数」であれば数字で表せるから誰にでも同じ基準となるが。しかし市長の発言のように「日本国民の心を踏みにじるもの」といった表現はあたかも踏みにじる「行為」を具体的被害と連想するが、実態はただの「不快な感じ」「感想」である。しかし、この「不快感じ」が一個人ではなく集団になり数の力が加わり、そしてその対象が直接的な「表現物」でなくその背景にある「特性」の「集団」「国家」「民族」などに向かい、

広がるそれが「表現の自由」(客観性)とそれを「見たくない感情」(主観性)の対立になる。哲学的には客観とは「主観の認識・行為の対象となるもの。主観に現れるもの。世界」、主観とは「対象について認識・行為・評価などを行う意識のはたらし、またそのはたらしをなす者」となる。日本語での日常用語では客観は「全員が理解できる考え方」で主観は「ひとりの考え方」という意味になるが、これは対象を認識する場合の哲学的な本来の用語ではない。客観というのは、主観(個々の人の考え)が入る前の対象物のことである。だから客観物自体には「意味」は事前には与えられていない。その客観に意味を与えるのは主観である人間の方である。よってその意味によって感情が生まれる。この展示会でも展示物自体は「客観物」であり、それ自体が「不快」ではない。それを見た個々の主観が「不快」であると感じるだけである。だから、市長が不快と感じたのはあくまでも主観側であり、一個人の感想である。決して、客観的なものでないはずである。しかし、実際はこの一発言により、「日本国民全体」の名譽が傷つけられたと解釈されたのである。

さて、今回の「事件」はテーマが「表現の不自由」ということで、何が問題かは比較的わかりやすいが、実は似たような問題は今までも、日本のみならず、国際的にも起きている。

(2) ヘイトスピーチ事件(日本)

まず「ヘイトスピーチ」である。1013年であるから、もう6年前のこと、在日韓国・朝鮮人に対する入管特例法などを在日特権と定義し、その廃止を目的として設立された在特会(在日特権を許さない市民の会)という団体がその差別的発言の故に「ヘイトスピーチ」として問題化され、それを禁止する法律まで検討され、その際「表現の自由」との保証の関係で議論された「事件」である。この時は現在よりも多様な意見が出て議論が盛り上がっていた。考えてみると、今回の「表現の不自由事件」は「表現の規制を求める議論」。前回の「ヘイトスピーチ事件」は「表現の保証を求める議論」。不思議なのは今回の「表現の規制を求める議論」には「表現の保証を求める議論」が圧倒的に少ないことである。その要因は絶対的強者である権力側(市長や官邸)が規制を求めたからであろう。

(3) シャルリ・エブド事件(フランス)

先の事件の二年後、2015年一月一日、フランス・パリで、風刺画を売り物にしている週刊新聞『シャルリ・エブド』のオフィスが、イスラム過激派の男二人に襲撃され、二人が死亡、多数の人が重軽傷を負うという事件が起きた。有力日

刊紙『ル・モンド』が「フランスの『二』と表現するほど、この事件はフランス国内外に大きな衝撃を与えた。

事件から4日後の二日には、事件の犠牲者を追悼するデモがフランス全土で行われ、30万人もの市民が参加。パリでは「私はシャルリ」というプラカードを持った市民ら20万人が大通りを埋めつくしたといえます。「私はシャルリ」というこの文言には、『シャルリ・エブド』の痛みを我がものとして受け止めるという思いだけでなく、表現の自由を死守しようという強い意志が込められていた。この事件は先の「表現の不自由事件」とは形式的には同じ構図である。つまり、表現物は一方では「日本国民の心を踏みにじるもの」、もう一方は「宗教心を侮辱するもの」ある。そして、一方は「権力者が介入」してその表現の自由を制限し、一方は「信仰を異なる一個人が暴力」によって表現の自由を制限した。

(3) 「表現の自由」の歴史的概念

権力によってであれ、暴力によってであれ「表現の自由とその制限」は、前号にも話したように、「自由の概念の歴史」から生まれた、人間社会形成での自然と理性との闘争の結果である。「個人の自由が無制限に拡大されると個人間の利害関係の葛藤が生まれる」これが「社会契約論」の始まりであるとも話しをした。そ

こで適度な制約は必要であるが、その度合いが問題なのである。なぜその自由のバランスが必要なのかは、人間の集団社会生活との関係である。

また、前号を繰り返すが「自由」概念は西欧の歴史からみて最初は宗教や王政権力からの解放、市民の自由であった。それがだんだんと人間の個人的私的な自由で個別化されていった。自由が個別化されるに従い、個々、個人間の争いが表面化してくる。そこで逆に国家や権力による制限がまた求められるようになったのである。だからして、自由の概念もまた、歴史的にどの段階を重視するかによって立場が分かれる。完全自由主義、完全平等主義、一部制限主義などである。しかし総括してこの自由概念は「リベラル」と呼ばれてきた。歴史的に近年までは自由一部制限主義であったが、しかし最近では規制が多い既存の体制を革新し完全自由主義、つまりアダム・スミスの経済原理を基本とすると完全自由主義へ帰れという「リバタリアン」が目立つようになった。されにこれは、ベンサムの結果がよければそれが正義であるとする功利主義が結びついて「新自由主義」という自由概念の哲学的正統性を主張する価値概念にもなってきた。

「表現の自由」もこの「自由の概念」にそって議論が進められている。なぜ「表現の自由」が必要かは「自由概念の歴史」にみられるとおりであり、人間個人の尊

厳尊重に基づく「自己統治の価値」「自己実現の価値」つまり「国民が様々な情報に接して意見を交換させることによって社会が発展するという」「民主的政治体制維持」が目的である。しかし、それが基本であるにしてもその方法は、「自由概念」と同じく「リベラルからリバタリアン」つまり「自由制限から無制限」まで幅広く意見や主義が存在する。さらに、現在「表現の自由」主流は「新自由主義」といわれる分野に属している。これが「思想の自由市場論」と呼ばれるものである。

(4) 思想の自由市場論

「思想、言論の自由市場」とは、自由競争市場で、最適な資源配分が行われるという経済学的な仮定を意識した比喻である。言論を自由にすることが、真理を発見し普及させるには最良の手段である。政府や世論の抑圧に対して言論・表現の自由を擁護した英国の哲学者ジョン・スチュアート・ミル著「自由論(1859)」の中で語られていることによる。その第二章の「思想と言論の自由」でミルは思想を統制したり、自由な意見の発表を阻害したりすることは人類全体に害を及ぼすとしている。「二人の人間を除いて全人類が同じ意見で、一人だけ意見がみんなと異なるとき、その一人を黙らせることは、一人の権力者が力づくで全体を黙らせるのと同じくらい不当である」この意

見は一見、極論のように感じられるが、ミルはその根拠を次のように説明している。まず、今、世の中の主流になっている意見は間違っている可能性がある。100年後には違った思想が正しいとされている可能性があること。また、仮にもし今の主流の意見が正しいとしても、少数意見とぶつかり合うことで真理がより磨かれる機会を持ち得ること。ミルがこのように考える背景には常に時代を変え、

真理を掘り起こして来たのが最初は少数の声だったという歴史的事実による。今日常識となつてきている地動説ですら、最初にその説を唱えた学者たちは火あぶりの刑にされるリスクを持っていた。さらに軍国主義になれば国家主義に逆らう思想や科学の書は禁じられる。これはナチズムでも昭和初期の軍国主義の時代でも実際に起きた歴史的事実である。

しかしこの「思想の自由市場論」も「自由の概念」で述べた「功利主義」と結びつく「自由放任主義」に通じる結果となる。すなわち大多数によって「その帰結」が効果的であれば「正義」になってしまうことである。現在の表現の自由の動向は「市場で儲ければ正義(富の原理)」「多数の賛成があれば正義(数の原理)」などによって支配されている。それにそれらを権力が利用すると、「神の見えざる手」(アダム・スミス)が働かなければ暴走するであろう。

(5) アイデンティティとナショナリズム

さて再び「表現の不自由事件」の問題に戻ろう。今回の事件は以前の「ヘイトスピーチ事件」「シャルリ・エブド事件」と共通する点は、その哲学的な意味での「客観的」な表現対象を認識した人間の主観的「このころのアイデンティティ(個人の帰属性)」の問題である。「表現の不自由事件」「ヘイトスピーチ事件」は「日本人」「シャルリ・エブド事件」は「宗教」である。つまり日本での前者二件はその表現が「純粋な本来の日本人」に対する侵害と感じ、そして後者、フランス

では「一見「イスラム教対キリスト教」という「宗教的帰属」の問題とみえるが、この事件はそうではなく、フランス特有の「ライシテ」教会と国家の分離の原則(政教分離原則)、すなわち、国家的宗教的中立性・無宗教性および(個人の)信

教の自由の保障を表わしている。つまり、フランス革命の精神である自由が歴史的に継続しているのである。だから、この事件も「フランス人のこのころ」の問題ということになるかもしれない。

このように「表現の不自由物」を認識した人は主観的に自分のアイデンティティに属するものを攻撃されていると考えると「不快」な感情が生まれる。本来「考えること」と「感情」を持つことは分離するはずであるが、こと自分個人とその

所属集団の関係になると、「感情的」になることは避けられない。これは人間が本来、一人では生きていけない集団でしか自然では生きられない動物であることを示しているのである。自分自身の死活問題になると「理性」ではとどまらなくなり「感情的」になる理由でもある。その人間のアイデンティティは大きくは「民族」「国家」「宗教」「思想」、そして「歴史観」まで及ぶ。

さて「表現の不自由」で攻撃された「日本人のアイデンティティ」と何か。それは慰安婦問題や徴用工問題のような20年以上前の「歴史問題」によって攻撃され、差別されている「日本人のこのころ」のことであろう。つまり、展覧会での展示物はほとんど「大日本帝国時代の侵略の表現」である。すなわち「攻撃されたもの」がいう「日本人のこのころアイデンティティは大日本帝国の歴史観」ということになる。一見、「日本人のこのころ」というと「日本人の全歴史、心情」が侮辱されたかのように思えるが全くことなり、一時代の歴史であり、しかもその世界的評価は主張できないものである。これらは「歴史修正主義」とか「日本人アイデンティティ主義者」と一括りにされる場合もあるが、現在も言論思想を席卷している思想グループである。これが政権の権力と結びつき、国民の思想改造を試みていることは政治がマスコミ、教育、学

でその痕跡がみられる。

この「日本人のアイデンティティ」は読み替えれば「ナショナリズム」である。全世界的にみれば「アメリカ第一主義」「英国巴離脱各国でのナショナリズム」政党の台頭などもこれらの流れである。このナショナリズムも以前の本コラムで議論したテーマである。つまり、ナショナリズム（愛国主義）とパトリオティズム（郷土愛）が混同されることである。今回の展示も「日本人のこころ」とはなにも「郷土愛」が傷つけられたわけではない。まったく困った取り違えであるが、このように簡単な区別が恐ろしい国家間の戦争を引き起こすことは歴史が繰り返して証明している。また、権力者はこれを扇動し憎悪を増幅させ、敵対的戦闘意識を盛り上げるのに利用してきたのである。今回の「事件」はこのれら歴史の繰り返しの前兆でもある。「表現の自由」は守らねばならない。しかし、「自由」は永遠に議論を続けていかなければならない。それが、民主主義の基盤であるはずである。今回の事件は民主主義の危機でもある。



大峯奥駈道(27)

下村嘉明

奥駈道を歩いていていつも目につくのは、天理大学のワンダーフォーゲル部の案内板である。主だった登山道には全てあると言ってもいいだろう。かなり古い看板ではあるが、ブリキで黄色く塗装された看板は朽ちることもなく登山者の案内役を今も果たし続けている。

この事業も大変だったと思われる。すべてのルートを歩きポイントを定め表示文を考え間違いないように樹々などに付けて回るのは何年もかかったに違いない。付けた後も幾度か点検のために歩かれたと思う。

天理市から大峯山系までは決して近くはない。幾度も山行を重ねたことだろう。部員も多く活発な時代だったと想像できる。

しかし、この計画を企画した部員は凄いなと思う。この発想と実行力は大変なことである。

私が所属していた山岳部では、このような発想が皆無であった。社会的な発想自体がなかった。しやにむに登りヒマラヤの未踏峰に憧れる閉じられた世界で活動していたのである。もちろん学生運動が激しく校舎がバリケードされている時も、平然とバリケードを潜り部室へ通っていた。社会や学生運動などは関係な

ったのである。

もちろん、学生運動に関心があった部員もいたが、ごく少数派であった。その少数派であった先輩は今でも「あいつらは、全く社会認識が足らん。おれが、リーダーに学生運動に山岳部としてどう考えているのですか、と質問しても何も答えが返ってこないから、こんな山岳部はやめようと思いやめた。」当時入りたての私は良く事情が分からず、その先輩ともトレーニングをした。その縁もあり今でもよく酒をおごって頂いている。誠にありがたい先輩である。先輩は卒業後、マスコミ関係に就職しジャーナリストとして活躍されていて社会問題についての目は厳しい。

学生時代に感じた問題意識を忘れることなく持ち続けて戦っている姿をみると敬服するばかりである。私の知る限り、社会問題に取り組んでこられたのは、この先輩だけである。

当時の部員たちは、わりと裕福な家庭環境で育ち社会問題への関心も低かったのだろう。やはり、問題意識が芽生えるには、友達や家族など身近な人々が苦しい生活にあえいでいる事への認識と洞察が必要だ。なぜそうなのか？と問い詰める自問自答が欠かせない。

大方の人は、自分には関係ない、見たくもないし知りたくもない。人生楽しもうじゃないか、自分は安定した職業に就き安定した人生を送ればよい。何も他人

の問題に関与する必要はない。

このように考えるのが、一般的だと思う。

また、学生時代には、かなり過激な問題意識を持っていても、社会に出れば通用しないと早々に諦め会社第一の会社人間になる。社会的な正義など棚に上げ、会社の利益第一の目標に向かって邁進する。とてもじゃないけど、社会問題を考える余裕がなくて、会社人間になってしまふ。また、そうしないと会社の中では生き残れない。

しかし、世の中そんな人間ばかりではない。何とかして学生時代に考えた夢を実現しようとする奴がいる。高知でリハビリ専門医になって高知県をリハビリ先進県にする豪語し懸命に努力している先輩もいる。

山岳会の集まりで評価を受けるのは、金儲けをうまくした人や大企業で役員になったような人たちがかりで、社会問題に取り組んでいるような人は評価されない。要は金次第という基本は変わらないのである。

政治的な匂いを嫌う風習は、ほとんどの会合で感じる。たいした議論もせずシャンシャン大会で終わり、次の宴会でも、どうでもいいような事ばかりで盛り上がる。

看板を付けた天理大学ワンゲル部の当時のリーダーに会って話を聞いてみたい気がする。もしかして、南奥駈道再興を

願った前田勇一さんと、どこかでつながっていたのではないかとさえ思えてくる。

大人の今昔物語(60)

石川 吾郎

今回は芥川龍之介の有名な小説「羅生門」の原話です。この物語集の中では最も知られている話でしょう。教科書に出

ない度は、二〇五。

羅生門の上層(うわこし)に登り、死人を見た盗人の話(巻第二九 第十八)

今は昔、摂津(つ)の国あたりから盗みを働こうとして都に上ってきた男がいた。この男、日が暮れるにはまだ間があつたので(都の正門である)羅生門の下に目立たぬように隠れ犯行を狙っていた。平安京のメインストリート朱雀大路の方向には人の往来が多いので、人かげが少なくなるまで待とうと考え、門の下で時間を潰すことにした。すると都の外、山城の方向から人が大勢やってくる音がする。「まずい。姿を隠そう」と、羅生門の上層にそつと登っていった。ふと見ると暗闇の中にほのかな光が見える。

男は不審に思い、連子窓から中を覗いてみると、若い女の遺体が暗闇に横たわ

っている。そしてその枕もとには、白髪の老婆が火を灯し、その死んだ女の長い頭髪を少しづつ抜き取っている。

これを見た男「もしやこれは、鬼の仕業では」と、一瞬恐怖でぞつとしたが「ひよつとしたら生き返った死人かも知れぬ。試しに威してみてもやろう」と思い直して、そつと戸を開け、刀を抜いて「おのれは、おのれは」と叫んで走り寄る。と、老婆はびつくりして手をすり合わせ許しを請う。「お前のようなババが、何をしているのだ」と問いつめると、老婆「私めの主(あるじ)であられたお方が亡くなられましたが、弔いをしてくれるお方がございませんで、ここに遺体を置かせても増るんです。そのお方の御髪が一丈にも増して長いので、これを抜いて鬘にしよう」と抜いております。そんなわけで、どうぞお助けくださいませ」と言うので、この盗人、死人が着ていた着物と老婆の着物と、抜き取った長い髪とを奪い取り、走り下りて逃げていった。

さて、この羅生門の上層には死人の骸骨が多くあつたものだ。亡くなった者の弔いが出来ぬときには、羅生門の上にその遺体を置き去っていたというものだ。この話は、その盗人が語つたものを聞き継いで、このようにも語り伝えたといいことだ。

《コメント》

この話は芥川龍之介『羅生門』の原話。

これを機会に、芥川の小説も再読して比較をしてみられるのもよいかと思います。小説はほぼ原話に沿って進められており、細部の描写がリアルにふくらませてありますが、その他に大きな変更があります。その一つは、老婆が自分の行為を正当化する議論です。つまり乱世の時代を生き延びていくためには、悪事も厭うことができないのだから、自分の行為も正当化されるのだと。これを逆手にとって芥川の主人公の男も老婆の着物をはぎとるといふもの。原話では、会話と行為が語られるのみで内省的な部分は無論語られていません。

プロット上の相違では、遺体の女が老婆の女主人であった点を芥川は語っていません。原話では男が老婆の着物だけでなく、遺体の着ていた着物と抜き取られた長い髪をも奪い取る点が目立ちます。男が高価であろう遺体の着物を奪わないのは、やや不自然な気がします。当時の盗賊は、他の話でも「おいはぎ」の名の通り、身ぐるみはいでいくことがほとんどです。当時の着物の価値は、現在に比べて比較にならないほど高かったのでしょうか。

尚、芥川の作品では、遺体の女は生前、へビを魚と偽って売りさばいていたと老婆に語らせています。このエピソードは『今昔』の中の他の話しからとってきたもので、うまく使っていますが、女主人は髪ので、うまく使っていますが、女主人は髪だったのでないかと想像されます。

舞台となった羅生門は、現在でも京都市

の南部、東寺の西方の九条通りにその石碑が残っています。また平安京のメインストリートであった朱雀大路は、現在の千本通りにあたります。

芥川龍之介の作品をはじめとする日本文学の作品(著作権の切れたもの)の多くをネット『青空文庫』で無料で読むことができることを申し添えておきます。

B級サフリーマン渡世譚(74)

明石 幸次郎

韓国編(担当者の役割)(27)

明石はT田が使った「世界的企業」という言葉に驚くと共に感心しましたが同時に、何を夢みたいなことを言っているのかと、少し違和感を感じながら聞いていた。

「大阪の、しかも難波の外れに本社があり、そこが創業の地とは言うものの元鋳物工場から始まった場所に、今だ本社機能と役員が居て、体育館、健保会館、プール、本館、新館、別館と堺工場に分工場まである。せめて、輸出本部だけでも東京本社にもって来ないと、ここ大阪で、働いていては、社員は世界的企業を目指して働くという、発想も行動も外部からの刺激なども入らないし、その

為の自己研鑽もしないのではないですか？まあ、若手輸出部員は、英語が出来て、英字新聞の経済面位を読んで、海外市場の尖兵として、もつとアメリカ、ヨーロッパに出て行かないとだめですね。輸出を増やさないと会社は大きくならないし、国内でちまちま稼ぐ会社で終わってしまいますね」と今度は、日本酒をぐいっと飲み干して「今日はアメリカ市場報告会を役員の前でやりましたが、社長も含めて海外の事を分かっている役員はM地副社長とうちのS田専務だけです。エライ人は難波の端に居るからですか、部下には言葉では現状の改革と言っているが、ご自身は現状に甘んじて、それを變えて行くというオーラを感じさせない役員は何人もいないんじゃないですか？社長もアメリカ市場を今の二倍の500億にする計画に対し、イエスもノーも言われませんでしたね。専務に対しては、大丈夫かね？と質問？みたいな事を言われていましたが」と話が段々と熱を帯びてきた。

K田部長は「専務はどう答えられていたの？俺は、やるのであれば、少々失敗しても、長期的な絵を描いて、それを持續して、描き続けないと駄目や！特にアメリカなどを相手には、中途半端なやり方では、持続的拡大は難しい。市場で争うのは平和的な競争やで。その市場に合った、高い品質の製品で、それを適切な価格で導入出来る会社が勝利するんや。

これは、明石君、それはTちゃんが最前線に苦勞してやっているアメリカだけではないどこの国の市場でもそうだ。俺はTちゃんにも新入社員時代から言っていたが、自分が担当した市場は、ライバルに負けたら駄目や！自分でどうすれば拡大出来るかの絵を描き、それを實現する為に、周りを巻き込みながら、人を動かさないで、自分だけではどんな優秀な人でも實現できない。なあ、H川さん」と話をH川に向けた。

すると、黙って日本酒を手酌で飲みながら聞いていたH川が「そうですね。K田さんは知っておられるが、Tちゃんも明石君も知らないと思うが、最初に海外市場に出て販売会社を自社の力で作り、自社ブランドで勝負しようという方針を出されたのは、Tちゃんが言ったM地副社長や！K田さんが行っていたブラジルもそうや、台湾もタイ、インドネシア、ビルマその後のフランス、アメリカもそうやで、業界で最初に自社ブランドで海外に出て、しかも海外要員は当時1960年代は社内には誰もいない時代にね。国内販売をやっていた優秀な若手を海外要員として異動させて、どんどん海外に出して経験を積ませたのや。その若手が今や第一戦の課長になっている」と明石には始めて聞くような興味のある内容であった。

その話を聞いていたT田がK田部長の質問に答えて「専務は当然のこととして、

私が報告した計画實現の為の課題としてあげた、人、もの、資金への協力を各担当役員に説明して協力を取っておられました。最後に副社長が中期計画の實現の為に最新鋭の工場を筑波に建設したこと、生産能力的には何ら心配ない。後は、販売網の拡大、優秀な現地マネジャーの確保と製品開発力とサービスマンのレベルアップそれとクレジット会社設立であると、我々がプランした線に沿って、的を突いた話を社長に向かって話されました。最後は、各担当役員に対し、全面的に輸出本部の描いた計画實現に向かって協力をするようにと社長の前で、言葉を取られてました。どの役員よりも迫力があり、威厳がありますね、あの方は。誰も反論したり、質問をしたり、されなかつた」と答えた。

「まあ、それは、良かったなあ。Mさんの後押しがあれば、大丈夫や！Tちゃんが描いた計画が實現出来る、第一歩を今日は踏み出した記念の日や。乾杯といこう！」と言って夫々が酒を注ぎ、乾杯をした。

明石は、黙って聞いていたがT田の話が大きいことと、その大きな話のシナリオを書いているのが横に座っている一年先輩の人かと改めて横を見て「お疲れさまでした」と声を掛けて日本酒を注いだ。T田は「どうですか？輸出部の印象は？」とビールを明石のコップに注ぎながら当たり障りのない質問をしてきた。

明石は「若い人が伸び伸びと仕事をしている感じを受けました。それと、工場は仕事に追われるようなところがありますが、輸出部は逆に仕事を追いかける、自分で仕事を取りに行かないといけないところだと思いました」と新入社員のような答えをすると「そうか、君は今まで何をやってきたの？」と聞かれたので「本社資材部で工場設備の購入と輸入業務を5年やって、堺工場で2年プレス部品の調達業務をやっていました」「そうか、営業部門は初めてなのか？」

「そうです。宜しくお願いします」と先輩に敬意を表して謙虚に答えた。

K田部長が「Tちゃん、明石君は今週木曜日から韓国に出張する事になっているのや。まあ、今日はその激励も兼ねているんや」と笑いながら言うところや。

T田は「へえ、そうですか。輸出部に來て早々の出張、輸出第1部ではありえませんが、さすが、K田さんの第2部は違う。どんどんチャンスを与えてもらえる。そう言う意味では、明石君、良い部署に來たんだ。私もM居さんの下で韓国はやつたことがあるが、中々、入り込むまでが難しい相手で、苦勞した事を覚えてい」と言われた。

T田は誰もが期待し、晴れやかに見えるアメリカ市場という大きな世界で羽ばたこうとするA級サラリーマンに反して、

明石は、ともかく問題を起こさず巧くやつてくれという期待を感じながら、T田

が歩くような晴れやかな表街道と全く違った、B級サラリーマンとしての裏街道をこれから歩くのかと思うと、それはそれで、表街道では味わえない珍奇で面白い経験が出来るのではと、冒険心が酒に酔った勢いで湧いてきて、与えられた仕事を自分なりに納得させようとした。



オクラの山たより (36)

困生

一

先回は小野篁が父親以上の才能に恵まれて嵯峨天皇の寵愛も受けつつ比較的楽天的な文人たちの雰囲気にあつてスルスルとおのれの才能を伸ばしつつ官位も上昇させていったことを述べました。

もちろん、誰の人生もそうであるようにいつも順風満帆というわけにはいきません。小野篁の人生にも当然のことながらとんでもない災厄が降りかかったことがあります。正史によれば大きなもの

は二つあります。一つは隠岐の島に流罪になったこと。もう一つは大和国法隆寺の資産問題に首を突っ込んだことです。今回は、三十三歳の小野篁がぶつかった隠岐島配流事件について述べることにします。

二

さて、小野篁の和歌で最も有名なのはなんといつても次の作品でしょう。

わたの原 八十島かけて こぎいでぬ
人には告げよ あまのつり舟

(広々とした大海原に多くの島をめざして
漕ぎ出したと、都の人に伝えたおくれ、漁師の釣船よ。)

この和歌は百人一首にも古今和歌集にも採られた歌ですが、この歌ができた事情について古今和歌集の詞書には次のようにあります。

「隠岐の国に流される時に、舟に乗りて出でたつとて、京なる人にもとにつかはしける」

隠岐の島に流されるとは穏やかな表現ではないのですが、八三八(承和五)年、遣唐副使に任命されていた篁は遣唐大使の藤原常嗣とトラブルを起こした末に、病氣と称して遣唐使の船に乗って唐に向かわなかったため、隠岐の島へ流罪となつた事実を指しています。これだけのことから流罪の原因を理解しようとすれば小野篁のわがままが原因と考えてしまい

ますが、トラブルが起きた事情は複雑です。

遣唐使で唐に行くのは嫌だといつて駄々をこねたとすれば、すぐに思いつくのはその危険性です。よく知られているように当時の舟で東シナ海を横断して唐の国に行くのはかなり勇気のいることでした。研究者によれば唐に行つて帰つて来られる生還率は六割ぐらいだという報告があります。唐に向かった五人に二人は故郷の地を踏めませんでした。安倍仲麻呂や藤原清河のように唐の地で客死した人もいたのですが、大部分は行き帰りの航海で海難事故に遭つて死亡しています。

まことに雑な計算ですが、遣唐使を乗せて派遣された船は通常では四隻。一隻には大使または副使、船乗り、通訳、留学生など合わせて百三、四十人ぐらいは乗っていたという記録がありますから四隻ではおおよそ五百人ほどです。統計的には、この中で二百人ほどは帰らぬ人になつたという計算になります。よほどのことがない限り「行け」と命ぜられても出世志向の方はいざ知らず、まずは固辞することでしょう。

しかし、です。小野篁は未帰還率四割という事実を恐れをなして唐に向かわなかったわけではありません。実をいうと八三八(承和五)年に小野篁が渡航拒否をした第十九回目の遣唐使は、すでにそれ以前に二回も渡航に失敗して三度

目の正直ともいえる渡唐団であったのです。その渡航に失敗した八三六年、八三七年の二回とも篁は副使として乗船しています。

小野篁が遣唐副使となつたのは八三四(承和元)年。その後、二年あまりをその準備に費やし、八三六(承和三)年五月十四日に四隻の遣唐使船で唐の地をめざしました。七月二日に筑紫の湊を後にしましたが、玄界灘で台風にあい、第一・第四船は肥前国に流され、第二・第三船は行方が分からなくなりました。その後、小野篁が乗船していた第二船は肥前国の松浦郡に漂着しました。かわいそうだったのは第三船です。嵐の間に船の舵は折れ、船は奔流のなすままに施す術もなく流され、ついに判官(三等官のこと)と第三船の指揮者は「このままでは全員が渴死するだけだ。船を壊してイカダをつくり、それに分乗して逃れた方がよい」と判断を下し、全員が船から脱出しました。結果として生き残つた者は百四十名中わずかに二十八人。遭難時のことがこのように詳しく分かっているのは助かった人の中に留学僧がいて大宰府に報告書を提出し、それが今に伝わっているからです。

翌年の八三七(承和四)年七月二十二日。かろうじて残つた三隻の船を修繕して再び唐をめざして九州の西北の突端を出発しました。しかし、またもや逆風にあい第一船・第四船は壱岐島に流され、

第二船は五島列島の値嘉島（ちかじま）に漂着したため、渡唐は失敗しました。

そして三回目です。ここでトラブルが発生しました。大使であった藤原常嗣が篁の乗る第二船をさまざまな手段を使って取りあげてしまったのです。

大使である常嗣の乗る舟は第一船で船大工が第一に推薦する船でした。「この船なら大丈夫」と常嗣は「太平良」という船名までつけてご機嫌でした。ところが、この第一船は穿（あな）から海水がもれるという欠陥があることが二回の航海で分かったのです。そこで常嗣は二回の遭難にも比較的損傷が少なかった篁の第二船を取り上げ、自らが乗る第一船にしようとしたという次第。常嗣はそのことの許可を得るため、わざわざ京の朝廷に上奏し、しかも朝廷で卜定した結果（もちろぬ常嗣の言うとおりで「いいよ」という内容）の詔まで手に入れた上で篁に迫ったのです。これには常嗣個人に対するだけでなく、先の決定を簡単に覆した京の朝廷のいい加減さにも篁は「ふざけるな！これで天下の公正さがたもてるか。」と怒りを爆発させました。そうして彼が取った行動が病氣と偽つての乗船拒否であったのです。

常嗣の自分勝手な横暴ぶり、そして、その横暴をたしなめるどころか、ホイホイと前の決定を覆してしまう朝廷の優柔不断ぶり。そうした彼の怒り、そして乗船を断固として拒否した胸のうちを記し

た文書が正史に残されています。意識して紹介します。

「初め大使が乗る船をどれにするかを

決めた日、最もよい船を選び取り第一船とした。他の船も誰が乗るかを決めた後、二度の遭難・漂流の後に、今、一朝にしてその決定を覆して危ない船を私に押しつけようとしている。自分の利益のために他の人に損害を与えようとしている。このことを為そうとしている人の心のうちを思えば、これは人の道理に逆らつてする行いである。船を取り上げられた私はもはや面目を失つた。どうして危険な航海に部下を率いて行けようか。私こと篁の家は貧しく親も老いている。我が身もまた病弱である。そこで私は水をくみ薪を採つて、きちんとはできないまでも親孝行の一部なりともしようという所存である。」

よほど篁は怒りが収まらなかったでしょう。この文書の他に彼の幽憤を「西道の謡」という漢詩に託して「そもそも遣唐使つて何やねん、まったく意味ないやろう」とその役目・目的を痛烈に風刺しました。残念ながら、この詩の内容は今に伝わりません。しかし、これを目にした嵯峨上皇が大いに怒り「其の詞は興にしたがひて（感じたまま述べて）、多くの忌諱を犯す」とされて篁の罪を公卿たちに論じさせました。そして、出た結論は仮病まで使つて天皇の命令を拒否したこ

とは当時の「律」によれば絞首刑ですが、当時の習慣で一級減ぜられて隠岐島に遠島でした。

ここで大急ぎでお断りしなければならぬのは藤原常嗣が無能かつワガママ放題のどんでもない男であるというわけではない、ということ です。

藤原常嗣は藤原北家の流れで藤原葛野麻呂の第七子でした。すでに北家は藤原冬嗣によって藤原氏の中でも抜きんできた地位を築きつづありました。しかも父親である葛野麻呂は八〇四年に派遣された遣唐使（このときの遣唐船で最澄や空海が渡唐したこと有名）の大使をつとめており、すでに参議でもあった常嗣自身も大学に学んだ経験を持つており漢学の才にすぐれ、また書家としても有名でした。家柄そして父親の経歴や本人の地位や学才から考えてみれば朝廷が彼を大使に任じたのは妥当なところだったでしょう。

もちろん、大変な苦勞をしながらも大使としての任をつつがなく果たし無事に帰国した常嗣の功績は大きいといえます。特に筑紫の国を出てから長安の都に着くまでの苦勞はかなりのものであったらしく、その苦勞がいかほどであったかは常嗣らともに唐に渡った円仁が旅行記「入唐求法巡礼記」に詳しく書いています。

とはいえ出発時には小野篁。そして帰国時には部下とトラブル（帰国のルート

で意見が対立した。結局、部下が主張した通りのルートになった）を起こした事実からみると、遣唐使全体を統率する常嗣の能力に関して疑問があり、マネジメント能力に欠けるところがやはりあつたのではないかと筆者には思えます。

三

以上の経過をたどつて官位をすべて剥奪された上で小野篁は八三八（承和五）年十二月、隠岐島に流されました。その際に彼が作つた歌が冒頭にあげた「わたの原 八十島かけて……」です。それと同時に作つたとされる歌が「古今和歌集」巻第十八雑歌下にあります。

思ひきや 鄙の別れに おとろへて
海人（あま）の縄たき いざりせんとは

（今まで思いもよらなかつたよ。都の人々と別れて遠い田舎に暮らして、漁師の釣縄を使つて漁をするようになるうとは）

また、「和漢朗詠集」行旅の部に次のような漢詩の断片が収められている。

渡口郵船風定出 渡口の郵船は風定まつ

て出（い）で

波頭謫処日晴看 波頭の謫処（たくしよ）

は日晴れて看（み）ゆ

「渡口」は港。「郵船」は流人の自分を運ぶ船。「波頭の謫処」は波間に見え隠れしている流刑地である隠岐の島のことです。この詩句がそれにあたるかどうかどううかは不明ですが、小野篁は流される途

上で「謫行吟七言十韻」を作ったと正史にはあります。この作品は「文章は奇麗、興味は優遠（「艶」と意味は同じ）にして、文を知るの輩、吟誦せざるはなし」という具合に世の人々に評価されたとあり「天下無双」と讃えられた彼の詩文の能力のほどがわかります。

ところで、配流されるときは、筆の真意、つまり絶望していたか、ある程度の将来的な見通しを持っていたかを、残されている筆の作品はわずかしがなく、そこから探るのは不可能なことです。

しかし、「オレはもうダメだ。このまま離れ小島で人生を終わるのだ」としよげかえるのは筆者から見るとどうも剛直かつ反骨精神に富んだ彼らしい姿であるとは思えません。隠岐に流されていく道すがら「謫行吟七言十韻」を作ったというあたりからすると「これほどの才能を持った自分を、あの嵯峨上皇がこのまま見捨てることはあるまい」と思っていたのではないかと筆者は想像しています。

筆の想像通りであったかどうかは分かりませんが、隠岐配流後、一年半あまりで八四〇（承和七）年四月、彼は都に召喚され、翌年九月には彼の文才を愛する仁明天皇（嵯峨上皇の子）の処遇によって元の官位（正五位下）にもどされています。

以後、筆は順調に刑部大輔、陸奥守と官位を上昇させていきます。

その一方で、八四二（承和九）年七月

に嵯峨上皇が没すると、その死後八日目に皇位をめぐって承和の変がおきました。

前天皇の淳和天皇の皇統と嵯峨天皇の皇統とが対立する中で淳和天皇の子であった皇太子（恒貞親王）が謀反に荷担したことで廃せられ、仁明天皇の子であった道康親王（後の文徳天皇、母親は藤原良房の妹の順子）が皇太子にたてられた事件です。首謀者とされたのは橘逸勢・伴健岑の二人。仁明天皇はこの二人を謀反人として流罪としました。このシナリオを書いたのは研究者の一致した意見では藤原北家の藤原良房。この事件によって良房はおのれの権勢への限らない野望を抱くこととなります。

他方、無実の罪で謀反人とされた橘逸勢は護送の途中で死に怨霊に化したと都の人々を恐れおののかすことになりました。

この事件に際して仁明天皇のお気に入りであった陸奥守小野筆は同年八月に東宮学士（皇太子の家庭教師にあたる）を兼任することを命ぜられています。意地悪く言えば次代の権力者の懐の中へまよい具合にすべりこんだということでしょうか。

二年後の八四五（承和十二年）、小野筆は従四位下を授けられました。現代の大臣級のポストである参議の地位を得るまであと一步の距離です。ここで彼の生涯で最も大きな事件といえる事態が生ま

れます。法隆寺の僧である善愷（ぜんがい）が檀越（だんおつ）布主ことで寺の存続を経済的に支える檀家の長のこと）の不法を訴えるという事件が起きたのです。要するに法隆寺の一僧侶が寺の管理・経営をめぐる不正を告発した事件なのですが、この事件の審議に大きく関わったのが小野筆と応天門の変の伴善男でした。

この事件は一般にはよく知られていませんが正史にある小野筆の伝記の中では最も多くの字数を費やして語られている部分です。ですから小野筆の人生の記述の上では避けることはできない事件ですが、詳しい話は次回にまわすこととします。

【補足】

◇ 天平の遣唐使のこと

苦難に満ちた旅程で有名な遣唐使だが、その行程が比較的よくわかる使がいくつもある。七三三（天平五）年、七七七（宝龜八）年、八〇四（延暦三）年、八三八（承和五）年の四回である。延暦の遣唐使は最澄・空海がともに海を渡ったことで有名であり、宝龜・承和のそれはすでに何回かこの文章の中で紹介をした。ここでは天平の遣唐使を取り上げた。

天平の使節は七三二（天平四）年八月

十七日に任命された。大使は従四位上多治比広成、副使は中臣名代、判官は平群広成、紀馬主らである。

この天平の遣唐使一行は七三四年の一月末には長安に到着した。しかし、この場所には玄宗皇帝はおらず、多治比広成の一行は七三四年四月になって、ようやく洛陽の地で朝貢の品々を玄宗皇帝に献上することができた。長安で皇帝にあえなかつたのは、この年におきた大飢饉のために玄宗は大運河の終着点であり江南産の米の集散地でもあった洛陽に行幸し、しばらくここを居所としたためである。

朝貢の任務を無事に終えて広成一行が帰国の途についたのは七三四年十月のこと。四隻の船は蘇州を同時に出帆した。

しかし、その航海は平穩無事というわけにはいかなかった。まだしも順調であったのは第一船の大使の船である。一度は蘇州の南の越州まで吹きもどされたが何とか十一月二十日に種子島にたどり着いた。この船には後に活躍する吉備真備が乗っている。

第二船は副使の中臣名代が指揮をとっていた。第二船は東南アジア海域まで暴風に流されたが、何とか命ながらら広州に帰ってきた。だが、帰ろうにも船がない。中臣名代はいろいろと策を練り道教好きの玄宗皇帝に「日本で道教を広めたから帰国のチャンスを我らにお与えください」と願い出た。これが功を奏し、

帰国についての便宜を与えられ翌年の七三六年五月に薩摩を経て大宰府に入っている。ただ、帰国した中臣名代が我が国に玄宗皇帝の期待通りに道教を広めようとした記録・痕跡はまったくない。

第四船については帰国の記録も唐側の再入国記録もない。蘇州を出帆して間もなく遭難したのではないだろうか。

残っているのは平群広成が指揮をとる第三船。判官である平群広成がたどった運命は小説以上にドラマチックであった。

第三船は第二船と同じように悪風に流されて崑崙国（チャンパ国。現在のベトナム中部沿海地方にあった）に漂着してしまった。この第三船には百十五名が乗り組んでいたのだが、崑崙国の現地人（恐らく沿岸を準備していた兵たち）に捕えられ二十人ほどが殺されたり逃げ出したりしたあげくに、九十人あまりは疫病で亡くなってしまふ。かろうじて命を長らえたのは平群広成以下四名だけ。崑崙王によって抑留・軟禁されたが何とか欽州

（中国の南方の地。ベトナムのすぐ北にある。）まで脱出に成功し、その役人の助力で長安までもどつてくることができた。七三五（天平七）年のことである。

長安にもどった平群広成には唐の朝廷に仕えていた安倍仲麻呂を頼るしか方法がない。同邦人のために奔走する仲麻呂。その甲斐あって玄宗皇帝は渤海経由で帰国することを聞き入れ、船や衣食などを

与えてくれた。

七三八（天平十）年十月。ようやくのことで平群広成は渤海に到着する。まったくの偶然であったのだが、渤海国では日本への使節派遣が計画されていた。まさにラッキーである。平群広成の強い訴えに心動かされた渤海王は使節派遣を早めて急遽七三九（天平十一）年七月に派遣することとした。日本への航海の途中で渤海大使をのせた船が遭難するという事件が起きたが、広成は残った人々を率いて出羽国になんとかたどり着いた。この時、日本の土を踏んだ日本人は広成を含め四人。彼らは同年十月に平城京に到着している。六年に及んだ広成の長い旅はやっと終わったのである。

隠された歴史（11）

満田正賢

記紀は万世一系の天皇支配の歴史を創作することを目的として編纂され、古事記がその原型に近いという見方には疑問の余地がないと思われまふ。そして、日本書紀はそこに描かれた日本の歴史を朝鮮半島及び中国の歴史とリンクさせることを目的の一つとしていることは間違いない。今回は、日本書紀が日本の歴史を朝鮮半島及び中国の歴史とリン

クさせた手法を想定し、応神紀・雄略紀に絞って三国史記と日本書紀の百済関連記事との違いについて考えてみます。

日本書紀研究会を創設した三品彰英氏は「日本書紀所載の百済王歴」（日本書紀研究第一冊所載）において、「神功紀から応神紀に至る百済の諸王に関する所伝は、千支二巡すなわち百二十年を繰り下げれば彼我一致する。そして雄略紀の紀年はそのままにして神功紀・応神紀を百二十年訂正すれば、その間の百二十年すなわち百済系文獻の空白期間は消し去られてしまふ。」と考察しています。三品氏の論を引き継いでいるのが安本美典氏です。安本氏が「倭の五王の謎」（廣済堂）で展開した日本の歴史と朝鮮半島及び中国の歴史とのリンクに関する論は以下に要約できます。

- ① 古事記、日本書紀の編者は、神功皇后、応神天皇については年代についての確かな伝承をほとんどもっていないかつた。その意味では、年代について何も記していない古事記本文がもとからの伝承の形に近い。
- ② 日本書紀の編者は、三国志などの中国の史書を一方にもつていた。また百済記、百済新撰、百済本記などの当時存在した百済関係の史書をもつていた。そして、これらの史実をもとにやや強引な形で年代を定めていった。その際、まず、神功皇后の時代を邪馬台国の卑弥呼の時代に比定した。
- ③ 神功皇后の実際の活躍期間は十年から二十年であるが、日本書紀の編者は卑弥呼も壹与も西暦二六六年に晋に朝貢した倭王も神功皇后に比定した為、神功皇后の死を西暦二六六年の後にもつていった。
- ④ 百済関係の資料を実際よりも百二十年ほど古く位置づけた理由は、上記以外に百済の直支王の国内伝承があった為と思われる。直支王は日本に質として来た人であり、三国史記にもそう記載されている。百済に帰って王位をつぎ、西暦四二〇年に没している。応神天皇は神功皇后の後に即位しているが、応神時代に直支王が死んだという国内伝承が残っていたとすると、神功皇后の末年二六六年と直支王の崩御年四二〇年の差一五六年を応神天皇が埋めなければつじつまが合わなくなる。その結果千支を二巡繰り上げるという操作がなされた。
- ⑤ 必然的に、日本書紀にある百済関係の記事の年代を百二十年繰り下げれば百済関係の史書としばしば合致することになるが、日本側の伝承記事とも一つに合わせようとしている為、混乱が生じた。安本氏は、中国と朝鮮半島との交流記事は千支の操作をした応神紀と千支の操作をしていない雄略紀とが中国と朝鮮半島との交流記事において連続すると考察しています。そして倭の五王の比定にお

いて実際の年代が倭王讚に合致するのは
応神であると結論づけています。但し安
本氏は、頭から九州王朝論を否定して
いるため、日本書紀が日本の歴史を朝鮮半
島及び中国の歴史とリンクさせる為に創
作されたものであるという考察を行いな
がら、日本書紀の記述を倭王讚Ⅱ応神、
倭王武Ⅱ雄略という比定の根拠の一つと
してあげるという矛盾した論理展開を行
っています。古事記と日本書紀に共通し
て記されていること以外は疑ってかから
なければならぬと主張しているにも拘
わらず、古事記にはない応神紀と雄略紀
の呉への使者派遣記事を事実と捉えてい
るのです。(但し古事記の雄略記にも呉人
が渡来してきたという記事があります。)

日本書紀には倭の五王のうち讚(応神)、
武(雄略)を想起させる記事はありません
が、珍・濟・興を想起させる記事はあり
ません。宋書が記している倭の五王の親
子・兄弟関係(讚と珍は兄弟、濟と興は
親子、興と武は兄弟)は応神から雄略ま
での歴代天皇(仁徳・履中・反正・允恭・
安康)のどの様な組み合わせにも合いま
せん。一方で、朝鮮半島の全羅南道・全
羅北道には五世紀後半から六世紀前半
(倭の五王時代)に作られた九州系古墳
が多く見つかっています。倭の五王は大
和朝廷とは別の、九州にいた王であった
という仮説は、頭から無視しても良いと
いうものではありません。しかしながら
安本氏が行った、日本書紀における日本

の歴史を朝鮮半島及び中国の歴史とリン
クさせる手法に関する考察は、九州王朝
と朝鮮半島との交流を理解する上で大い
に参考になります。

私は、日本書紀に記されている各天皇
即位年の干支を西暦に直し、(ちなみに神
武天皇の即位が紀元前六六〇年であった
ということは戦前の誰もが知っていたこ
とですが、それは日本書紀に記されてい
る歴代天皇の即位年の干支と在位期間の
年数によって計算した結果です。)そして、
日本書紀の百済関係記事を応神紀の年次
を百二十年繰り下げて雄略紀の百済関係
記事とつなぎ合わせ、朝鮮半島の歴史書
「三国史記」に記された年次と比較して
みました。その結果、面白いことがいく
つか分りました。

三品彰英氏は「応神期三十九年戊辰は四
二八年となり、雄略紀所引「百済新撰」
のいう己巳の年は四二九年であり、記事
内容の上では直支王(ときおう)の新齊
都媛(しせつひめ)の派遣は己巳年の蓋
鹵王(こうろおう)立とすぐ接続する。」
と考察していますが、「百済新撰」のいう
己巳の年(四二九年)の記事は日本書紀
において雄略二年の条に記されています。
雄略二年は戊戌(四五八年)です。なぜ
雄略二年の条に己巳の年(四二九年)の
記事がでてくるのでしょうか。私には、
応神三十八年来日した百済王の妹「新齊
都媛(しせつひめ)」の記事と雄略二年に
出てくる百済の「池津媛(いけつひめ)」

の記事(天皇に寵愛される前に石川楯と
密通し、天皇の怒りを買って焼き殺され
た。)が百済新撰の「己巳」の干支の「蓋
鹵王が立った。百済は慕尼夫人(むには
しかし)の娘を着飾らせ、適稽女郎(ち
やくけいえはしと)といった。天皇に貢
進した。」という記事を介して一つに繋が
っているように見えます。「新齊都媛」は
応神三十八年以降現れていませんし、「池津
媛」は来日記事がなく雄略二年に突然現
れます。そもそも応神紀が直支王の崩御
を応神二五年と記載しながら、応神三八
年にすでに死んでいるはずの直支王が新
齊都媛を遣わしたと記しているのは明白
な誤りです。

日本書紀が引用した百済新撰には蓋鹵
王が立った年次が「己巳(四二九年)と
記されていたようですが、同じく日本書
紀が引用した百済新撰の蓋鹵王の「辛丑
(四六一年)の「蓋鹵王は弟の崑支君を
遣わして大倭に向い、天王に侍した。」と
いう記事の年との差は三十二年もありま
す。又三国史記は蓋鹵王の即位を四五五
年と記しています。これらのことから推
定すると、百済新撰の「己巳」の干支の
記事は干支の誤りである可能性が強いと
思います。

日本書紀の編者は百済新撰にある「蓋
鹵王が立った。百済は慕尼夫人(むには
しかし)の娘を着飾らせ、適稽女郎(ち
やくけいえはしと)といった。天皇に貢
進した。」という記事をどこかの天皇に結

びつける必要性を感じたのでしよう。干
支が間違っている「己巳(四二九年)の
蓋鹵王の記事は、干支(紀年)を重視し
た結果応神紀の新齊都媛の記事となり、
蓋鹵王の記事であることを重視した結果
倭王武に比定している雄略紀の池津媛の
記事となったと思われます。重要なこと
は、日本書紀の編者は百済新撰に記され
た天皇は誰かを知らなかった、又は知っ
ていてそれを大和朝廷の天皇に見立てた
ということなのです。

私は、百済新撰に記された蓋鹵王によ
る適稽女郎の記事の真相は、「蓋鹵王は即
位とともに、倭国(九州王朝)の王であ
る「武」に慕尼夫人の娘である適稽女郎
を自分の妹と偽って貢進した。しかし、
偽りが判明して適稽女郎は「武」に殺さ
れた。蓋鹵王は適稽女郎を自分の妹と偽
ったお詫びの為、自分の本当の弟である
崑支君「軍君」(こにきし)を倭国(九州
王朝)に人質として送った。」というよう
なことではなかったかと想像します
話は変わりますが、ここで島王伝承と
神功紀の類似について触れます。日本書
紀雄略五年(四六一年)条の本文に「加
須利君(蓋鹵王)は軍君(崑支)を朝廷
に遣わした。加須利君は軍君にすでに孕
んだ婦を与えたが、筑紫で児(島王)を
生んだので送り返した。」という記事があ
ります。この記事は①妊婦が朝鮮半島と
筑紫の間を往来した。②筑紫で子を産ん
だ。③その子が後に王となった。という

三点で神功紀の記事と酷似しています。舞台が筑紫であることからどちらも九州王朝の史書にある記事であり、九州王朝がどちらかの史実をもとにもう一方の記事を創作したのではないかという想像がかき立てられます。私は日本書紀が引用した百濟新撰の「武寧王の諱は斯麻王。琨支王子の子で末多王の異母兄である。」という記事から推定して島王の伝承の方がオリジナルではないかと考えます。神功皇后の三韓征伐譚は、色々な伝承を組み合わせて創作された一大叙事詩ではないでしょうか。

三国史記は日本書紀と同様に、幼年の腆支王（直支王）と蓋鹵王の弟の昆支君（軍君）が人質として倭国にいたことを認めています。しかし、日本書紀が引用している応神八年（三九七年）の百濟記には「阿花王が立つて、貴国に無礼であった。それで（貴国）はわが枕彌多禮・峴南・支侵・谷那・東韓の地を奪った。そこで王子直支を天朝に遣わして先王の好みを修めた。」と記されています。又雄略五年（四六一年）の百濟新撰には「蓋鹵王は弟の崑支君を遣わして大倭に向い、天王に侍した。」と記されています。三国史記が単純に「倭国」と記している部分は、日本書紀が引用した百濟記では「貴国」「天朝」、百濟新撰では「大倭」「天王」と記されています。一一四五年に完成した三国史記の編者は、当時の日本が「倭国」と呼ばれていたという知識を持って

いたので、安易に「貴国」「大倭」を「倭国」に書き換えた可能性が強いと思われる。日本書紀が引用した百濟系文書の表現こそがオリジナルなものでしょう。

日本書紀は「貴国」に人質として来た幼年の直支王の処遇も、「大倭」に人質として来た「蓋鹵王の弟の昆支君」の処遇も一切記載していません。そのことが、人質がいた場所が大和ではなく筑紫であることを証明しているように見えます。日本書紀の編者は、九州王朝の史書を都合良く利用しながら、筑紫での処遇が生々しく記載されている部分についてはカットしたと推定出来ます。逆に言えば、九州で直支王や昆支君の痕跡が発見されれば、それが九州王朝の存在の証明になるのではないのでしょうか。

百濟の王の出自について三国史記と日本書紀は次の部分が異なっています。

① 漢城を破壊された後熊津に都を移した文周王（汝洲王）は、三国史記では蓋鹵王の子と記載されていますが、日本書紀は蓋鹵王の母の弟と記しています。これは本文にある記述なので九州王朝の史書にあったものと推定できません。

② 武寧王について、三国史記は牟大王（東城王）の第二子と記し、日本書紀は百濟新撰の引用として「武寧王の諱は斯麻王。琨支王子の子で末多王（東城王）の異母兄である」と記しています。更に本文に「蓋鹵王が軍君（昆支

にすでに孕んだ婦を与え筑紫で生まれ
た子（島王）を百濟に送り返した」と
いう記述があり、昆支君の子とはなっ
ていますが、実際には蓋鹵王の子であ
るとしています。

文周王も武寧王も三国史記が単純な親子相続と記載しているのに対して、日本書紀はその背景と共に異なった出自を記しています。これが百濟と人質をとるまでの深い関わりを持っていた九州王朝の史書にあった記述であると想定すると、百濟の生々しい歴史が見えてくるのではないのでしょうか。三国史記には記されていませんが、久尔辛王（久爾辛王）が幼かった為に代わりに国政を執行したとされる木満致（もくまんち）の話も、それが九州王朝の史書に記されていた話と想定するとその信憑性が高まります。

日本書紀にある百濟との交流記事を応神紀と雄略紀に絞って俯瞰しましたが、日本書紀が借用した九州王朝と百濟との交流の歴史が記述されているという視点で眺めると、百濟の歴史、そして九州王朝の歴史が深くうかがえます。九州王朝論に立つて日本書紀の中の百濟との交流記事を解明しその物的な検証を行なうことが、九州王朝の存在の証明につながるものと思います。

道をゆく (5)

成瀬和之

「山の辺の道」(五)

行燈山古墳（崇神天皇陵）から天理市トレイルセンターを経て、少し行くと長岳寺があります。空海開基と伝え、釜口（かまのくち）大師の名で親しまれています。鐘樓門や阿弥陀三尊像（いずれも重要文化財）ほか寺宝が多く、簡潔な美を誇る庭園や裏山の石仏も見どころです。春にはツツジ、秋には紅葉が美しい花の古刹です。

もとの道に戻り狭い路地を抜けると柿本人麻呂の歌碑に出会います。

衾道ふすまぢを 引手の山に 妹を置きて

山路やまぢを行けば 生けりともなし

万葉集卷二二二二の歌碑です。

（歌の意味）

引手の山（竜王山）に妻の屍を葬って
おいて山路を一人帰って来ると
悲しくて生きている気もしない

思いがけなく、胸に迫ってくる歌碑に出くわしました。

調べてみると、連作と見られる短歌に次の歌もあります。

去年見てし 秋の月夜は 照らせ

ども 相見し妹は いや年離る

(巻二―二二)

(歌の意味)

去年見た秋の月夜は同じように照らすけれど、一緒に見た妻はますます時を隔て離れていってしまう

ますます悲しくなってきましたね。

歌碑の前には丁度よい休憩所がありました。そこには、年配の夫婦らしき一人連れが仲睦まじく碑を眺めて座っていました。そこで一休みしたかったのですが、はばかり休所を後に先を急ぎました。

念仏寺、五社神社を経て、先に進むと菅生環濠集落と竹之内環濠集落という二つの環濠集落があります。周囲に濠をめぐらせて、自己防衛した集落の名残りです。奈良盆地には環濠集落が多くみられます。これは、南北朝時代から長く続いた大和の戦国乱世を生きるために地域の人々が自衛したのですが、筒井順慶による大和の統一(一五七六年)で、その役割は終わりました。大阪府にも、戦国乱世に環濠をつくり、堺が自治都市として発展した歴史があったのを思い出しました。

「山の辺の道」は、歴史と万葉の風が満喫できる、心地いい田園地帯のハイキ

ングコースです。この辺で、最寄りのJR桜井線長柄駅に向かうことにします。

「我がおくのほそ道の旅」補足二

成瀬和之

山刀伐峠

(現代語訳)

宿の主人の話では、ここから出羽の国に抜けるには、途中に大きな山がある上に、道筋もはっきりしていないから、山越えには道案内人を頼んだほうがよい、という。それではと、案内人を依頼したところ、たくましい青年が、反りの強い脇差を腰にさし、櫂の杖を手にして、私たち一行の先に立って進んだ。今日は危険なめに遭いそうな気がしてならない、とびくびくしながら、後について行く。

宿の主人の言うとおりに、山は高く、木々は深く生い茂り、鳥の声ひとつしもない。木の下は、枝葉が鬱蒼と茂り合い、まるで夜道を行くように暗い。杜甫の詩に、

「雲の切れ端から、砂混じりの風が吹き下ろして、あたりが真つ暗だ」という句があるが、そんな感じだった。小笹のなかを何度も踏み分けて進み、流れを渡り、岩につまずいては、冷や汗を流すといったあんばいで、ようやく最上地方(山形県尾花沢地方)に出た。

あの道案内してくれた青年は、「この道は、いつもめんどろが起るんですが、

今日は何事もなくお送りできて、幸いでした」と、喜んで帰って行った。山越えが終わったあとで、こんな話を聞かされたのだが、それでさえも、胸の鼓動はいつまでもおさまらなかつた。

(原文)

あるじのいはく、これより出羽の国に大山を隔てて、道定かならざれば、道しるべの人を頼みて越ゆべきよしを申す。さらばと言ひて人を頼みはべれば、

究竟の若者、反脇差を横たへ、櫂の杖を携へて、われわれが先に立ちて行く。

今日こそ必ず危ふきめにあふべき日なれど、辛き思ひをなして後に付いて行く。あるじの言ふにたがはず。高山森々として、一鳥声聞かず、木の下闇茂り合ひて夜行くがごとし。雲端につちふる心地して、篠の中踏み分け踏み分け、水を渡り、

岩に躓いて、肌冷たき汗を流して、最上の庄に出づ。かの案内せし男の言うやう、「この道必ず不明のことあり。恙なう送りまゐらせて、仕合せしたり」と、喜びて別れぬ。後に聞きてさへ、胸とどろくのみなり。

(解説)

芭蕉を待ち受けていたのは、さらに険しい山道でした。名前を聞いただけでも不気味な「山刀伐峠」は、たくましい若者に道案内されて、ようやく超えること

ができました。冷や汗と胸どきどきの連続でした。その「山刀伐峠」に私も行ってみました。山形県の赤倉温泉(新潟県にも赤倉温泉があります)が、それとは別側から車で登ったのですが、急カーブの連続で、しかも道路に枯れ枝が落ちていて車の底をこすったり、引っかかりたりする悪路です。車一台がようやく通ることのできる道で、離合がないことを祈りながらの運転でした。芭蕉の「冷や汗と胸どきどき」を別の形で体験することになりました。

山刀伐峠では、「高山森々として、一鳥声聞かず、木の下闇茂り合ひて夜行くがごとし。雲端につちふる心地して、篠の中踏み分け踏み分け、水を渡り、岩に躓いて、肌冷たき汗を流して、最上の庄に出づ」の部分を加藤楸邨が揮毫した碑を見つけることができました。

芭蕉が山刀伐峠を越えた時の気分、「おくのほそ道」における「山刀伐峠」の章の重要性を体感できた、車での峠行きでした。

(補足のまとめ)

平泉をあとにした芭蕉と曾良は尿前の関を超えて出羽の国(山形県・秋田県)に入ります。ここから『おくのほそ道』は後半に入ります。前半は日本列島を北上してきましたが、後半は日本海側を西へ大垣まで向かうこととなります。みちのくで歌枕など何もかも押し流す

時間の脅威を目の当たりにし、無常迅速な時間の流れに洗われるこの世をどう生きたいかという大問題に直面して旅の前半を終えました。後半では月・太陽・星のめぐる宇宙を通り、そこからふたたび別れの嘆きに満ちた人間界へ戻ってきます。

その前半から後半への転換の間に、尿前の関を超え芭蕉一行は封人（関所の番人）の家に宿を借りますが、大雨に降られて三日間足止めを食らいます。このあと二人は山賊の出そうな険しい山道をたどります。蚤虱の匂、山中の悪路をすえて、劇的な転換を図るわけです。

やはり、江戸から大垣へ向かう『おくのほそ道』の道順を考えると、平泉と山寺の間にあった出来事を補足せざるを得ませんでした。

「我がおくのほそ道の旅」は、山寺から始まり、平泉で終わりましたが、東海道を挟んで「おくのほそ道」は円環として捉えることができるのかもしれませんが、再び江戸・深川から平泉をめざすと、より深みのある「我が奥の細道の旅」ができそうです。

俳人の長谷川権氏が、おくのほそ道を世界遺産にしたいと言ったそうですが、私もその意見に賛成です。既に世界遺産に登録されている熊野古道とともに、日本が世界に誇ることのできる歴史と文化の薫り高い「道」だと思います。



編集後記

もうすぐ秋が来そうな気配ですが、日中の暑さは真夏のような気温です。

先週の土曜日に、友達の誘いで吹田のアサヒビール工場見学に行きました。

これまで3回ほど三田市のキリンビール、四国の西条市にあるアサヒビールなどへ行ったので要領は心得ているつもりでしたが、ついつい呑み助の欲が出てビールの無料サーバーを飲みすぎてしまいました。

20分でグラス3杯迄となつてるところを、もう一杯勢いに任せて飲んでしまいました。普通の人は、一〜二杯かジュースを飲んでいましたが、あまりの美味さに四杯も一気飲みしました。

工場を出て吹田駅の中華屋で餃子を食べようということで店に入りまたビールを飲みました。婆さんのデイの迎えがあるので、急いで家に帰り世話をし終わったころに、久しぶりの旧友から電話があつて、難波で飲んでいるというから、私は飲んで気持ちが高ぶっていたためか、「それなら、今から行くわ」と駅へ走り、難波駅から一〇分ぐらいの店に行き、また飲みました。

しかし、明日の事もあるので一〇時過ぎに

は家に帰り風呂に入りベッドで寝ました。ところが、ドキドキして寝むれません。それで医者から注意されていた「酒に酔つて睡眠剤はいけませんよ」が心に引っかかつてはいたのですが、大丈夫と思ひ飲みました。しかし、いつまでたつても眠れません。

とうとう一睡もせず夜が明け、6時に起きて炊事の用意を始めていつものように家内を起こし、婆さんの世話をし、婆さんを送り出した後、すぐに家内を病院に連れていき、待合室で眠ろうとするのですが、眠れずドキドキ感がします。

なんかおかしいと思ひ、待合室の血圧計で血圧を測ると上が157、下が97、脈拍78になっていたのでびっくりしました。いつもは上が118、下が76、脈が62ぐらいですからかなり高い。

診察が終わつた家内を連れて自宅に帰り少し寝たのですが、まだおかしい。デイ帰りの婆さんを世話してから、今度は気合を入れて睡眠剤を飲みました。翌朝起きるといつものように気分がいいので、朝ランをしたら身体が軽くよく走れました。

毎度のことですが、二日酔いのつらいのはたまりません。気分は最悪ですが、二日酔いのせいにして仕事をさぼることは出来ませんから、なんとかして長い一日を乗り越えます。

しかし、毎日運動しているからだろうと思うのですが、血圧や脈拍も低くなり身体の調子は至極良好です。ただ、酒の飲みすぎはいけません。少し酒が弱くなってきたようです。

その理由は、晩酌をやめたからだと思ひます。一年近く前から家で飲む酒は、やめました。飲みたいと思わなくなつたのが、理由です。よくわからないのですが、たぶん、朝早く起きてするランニングのせいだと思ひます。

毎日の運動は精神をも変えます。今度は、煙草をやめるかも。

《メモ》

大方は塩水である水の星

私はふだん水の中で暮らしているが、水の味などというものを意識したことはない。目の前の水は久しく留まることなく流れてゆくが、その流れのずっと先はどうなっているかなどについても考えたことはなかった。

しかし、私が生まれるずっと昔のことだが、大雨が降り続いてこの川が暴れ、何もかも根こそぎにして押し流す濁流になったことがあった。

そのとき仲間の多くが河口まで流され、海を見たらしい。海はこれまで見たこともないほど広くて大きい水たまりだったそうだ。いや、そんなことより海の水は苦くて辛くて、そこにいると体じゅうがずきずきして来た。多くの仲間がそこで死んだ。それでも何人(何匹)かの仲間が命からがら戻って来る事ができた。これはじいさんから聞いた話だ。じいさんもまた、小さいころに、じいさんのじいさんから聞いたそうだ。用もないのに遠くに行くな—だからみんな、自分が住みかにする穴倉が定まると、日長一日そこから穴の外を見続け暮らす。外に出たり、自ら陸に上がったたりするのは、

本当に必要な時だけだ。

今日は海の話をしようと思う。これは人間の学者から聞いたこと。正確には、私の住む川の調査に来た学者たちが水の話をあれこれするのを立ち聞きならぬ、「水聞き」したものである。簡単にまとめてみる。

○地球は水の星(ただし、人間が生活に自由に使える水は、全体の0.01%もない。だから地球は、「大方は塩水である水の星」だ)

(1) 海と陸地

地球の表面の割合

海 71% 陸地 29%

海の平均の深さ 3800m

陸地の平均の高さ 623m

(2) 人間の体の六割以上は水

命は水に包まれている

(3) 水の分布—地球の水の量を

100とする

海水 97.4 淡水 2.6

(淡水 2.6の内訳)

氷河 1.98 地下水 0.59

湖沼 0.015 (湖の半分は塩湖)

土壌水 0.005

大気中の水蒸気・雲・霧

0.0009 河川水 0.0001

動植物の体内水 0.0001

水の分布を見ると、水の大方は

海水であること、また淡水の大方は

氷河であることがわかる。地球の温暖化が騒がれ、南極や北極、またアルプスなどの氷河が融け始めたと言われて久しい。それではこの氷河が仮に全部融け出してしまったら海水面は一体どれだけ上昇するか。単純計算をしてみよう(融けてきた水は最後には海に入る)。

地球の海は深さ 3800m のプールだと考えればよからう。このプールに入っている水の量は 97.4だ。そこへ 1.98の量の氷河が融けた水が加わる。すると海面は、

$3800m \times (1.98 / 97.4) = 77m$

こんなに上昇する。単純な計算だが、氷河の十分の一が融けても 77mの上昇である。日本でも相当の地域が海没する。そのうえで、東日本大震災級の大地震があり大津波が来れば、とんでもない被害に見舞われることだろう。「列島は活断層の手の平に」ある。

万葉の昔も今も青い海

新元号『令和』の抛り所とされた、太宰師大伴卿の宅の宴で梅花の歌が詠まれた頃も、辺野古には青い海が広がり命を育んでいた。政府はそこに、二百年は運用できる外国軍基

地を造ろうとしている。この計算を見ただけでもそういう思いやりは止めた方がいい。愚の骨頂と言うが、実に恐ろしいことだ。くわばら、くわばら。

俳句

土田 裕

遠き日や一家団欒西瓜割り
ふるさとの空に続くや秋の雲
善人と察して来たる小鳥かな
秋暑し同じニュースを幾度も
虫の音のやまないように闇の道

影山 武司

松明の火の粉跳ねたる川施餓鬼
鬼灯の朱に染まりたる掌
藻の揺るる水の光や秋茜
秋澄むや一里を駆ける寺の鐘
遠浅の波に緩びや休暇明
蛸や夕さりの風野を駆ける
つくつくし水切石の良く跳ぬる
卒塔婆のまだ新しき墓洗ふ
諍ひの漫才めくやとろろ汁
しり取りのラ行に詰まる敬老の日